誰にも触れさせたくない

林檎の葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰にも触れさせたくない

【Ｎコード】
Ｎ８０１０Ｅ

【作者名】
林檎の葉

【あらすじ】
風邪っぴき蘭ちゃん。看病していたコナンは、突然蘭に…。

（前書き）

この小説、Ｈ描写はありませんが、しいて言えば１５禁かもしれません。「深いキス」とか、「好きな人をオレで染め上げたい」とか、そういう描写がダメな人は、お読みになりませんよう…。

「蘭…！？」

掃除が終わり、そろそろ下校という時、校門の近くに蘭の姿を見つけて、オレは思わず声を上げた。今、時刻は1時半。帝丹高校は本来なら昼休みのはずである。にもかかわらず、蘭が学生鞄を持ってここにいるとは、いったいどういうことだろうか？蘭は、寂しそうな顔をして、オレの教室の方を見ている。ますますわけが分からない。何か緊急事態だろうか。オレの声に、クラスメートたちも集まってきた。一番初めに寄ってきた元太たちが、蘭の姿を見つけ、指をさす。

「あれ、蘭ねえちゃんじゃねえか？」

「ホントだー！！」

「何してるんでしょう…？」

元太たちの視線に気づいた蘭は、恥ずかしそうに隠れてしまった。ったく、何なんだよ、一体！？ＨＲが終わると同時に、オレは勢いに任せて教室を飛び出した。昇降口を出て、そのまま校門へ向かう。

「蘭…、姉ちゃん！」

蘭、と呼び捨てにしそうになったのを押しとどめ、蘭に声をかけた。

「どうしたの？学校は？」

「あ…、今日、職員会議で、午前授業だったの…。」

蘭が蚊の鳴くような小さい声で言った。すぐ嘘だと見抜けた。しかし、なぜそんなに怯えているのか、さっぱりわからない。

「…そう。でも、どうしてここにいるの？」

それがここにいる理由にはならない。ここは、帝丹小学校の正門なのだ。一本道を挟んだ向かいに帝丹高校があるが、だからといってなぜ…？

「う、ん…。」

蘭の様子がおかしい。言葉を発する時にも苦しそうにしているし、何だかふらふらしている。…もしかして！

「具合、悪いのか！？」

オレは慌てて蘭の顔を見た。蘭の顔は、苦痛に歪んでいる…！！オレは蘭にしゃがみ込むように言うと、額に手をあてた。熱い。かなり熱がある。

「……っ…」

オレはジーンズのポケットからケータイを取り出すと、目にも止まらぬ速さでキーを押し始めた。手先が器用なので、これくらいは朝飯前だ。電話した先は、博士。

「あ、博士！今すぐ帝丹小まで車で来てくれ！……いいから早く！蘭に熱があんだよ！」

博士と一緒に自宅に帰ってきたオレは、博士に手伝ってもらって蘭をベッドに寝かせた。高校生の体なら、自分一人でできるのに。できるはずなのに。体が小さいが為にそれができない事実を認めたくなくて、オレは部屋を出た。階段を降りて、事務所に向かう。ひょっとしたら、朝から具合が悪かったのかもしれない。でも、オレやおっちゃんに心配をかけたくなくて、無理して……。でも我慢の限界で、オレに助けを求めたくて、あそこに来たんだろう。オレは自分の不甲斐無さに、唇をかみしめた。どうして、気づいてやれなかったんだろう。どうして……。考えれば考えるほど、激しい後悔が襲ってくる。オレは大きく頭を振ると、事務所のドアを開けた。

「おじさ……あれ？」

おっちゃんの姿が見当たらない。どこにいるんだろうか。辺りを見回して、テーブルの上のメモを見つけた。

【マージャン仲間に誘われた。１０時には帰る。】

メモにはそう書かれていた。相当慌てていたようで、字はかなり乱雑だ。１０時とは、夜の１０時のこと。つまり、あと８時間強、この家の家主は留守なのだ。

「～～～～～～～～！！なんで肝心な時にいないんだよ！！！」

そう叫んで、思わず口を覆った。…いや、それはオレも同じじゃないか。人のことは言えない。蘭が危険な目に遭っている時、その場にいられなかったことは、何度もある。まさに、後悔先に立たず。蘭が一番傍にいてほしいと願った時に、いてやれなかった。それが何よりも悔しくて、情けなくて。オレは力任せにメモをびりびりに破くと、ゴミ箱に捨てた。怒りの矛先は、ここに向けるべきじゃないことは、自分が一番よく分かっていた。

「ん…。」

蘭が小さく声を上げた。目が覚めたらしい。

「…蘭。大丈夫か？」

「新一…。」

蘭がか細い声でオレの名前を呼んだ。

「…ごめんな。気づいてやれなくて。朝から具合悪かったんだろ？」

「新一が謝ることないよ。わたしこそ、ごめんね。心配かけて…。」

「いや、気にすんな。」

蘭の目はまだとろんとしていて、焦点があっていない。オレは蘭の頬に唇を寄せた。とたんに蘭がはっきり目を覚ました。体がぴくりと反応する。

「蘭…。」

蘭の表情が、声が、しぐさが。何もかもが愛しくて。…誰にも、渡したくない。触れさせたくない。ずっと、独り占めしていたい。自分の中の欲望が止められない。肝心な時に、理性は働いてはくれないんだと、オレはその時初めて知った。蘭の耳に、額に、顔中にキスの雨を降らせる。

「…ダメ…。風邪、うつっちゃう…。」

蘭が戸惑い気味に言った。そんな声さえも、オレにとっては、欲望を増進させる要因になる。

「…蘭の風邪なら、いいよ。むしろ大歓迎。」

そう言った直後、蘭の唇に、自分の唇を重ねた。最初は、触れるだけのキス。すぐにはなして、もう一度重ねる。今度は、深く。抵抗できないぐらいに深く、蘭の唇に口づける。

「ふっ…。」

蘭が甘い声をあげた。蘭の全てを、オレで染めたい。他人が入る隙間なんかないぐらいに、オレで染めあげたい。…そう思うのは、罪なんだろうか。

「蘭、愛してる。」

何度も何度も、唇をはなしては、重ねた。次第に、蘭の呼吸が荒くなってくる。窓の外から踏切りの音が聞こえたその時、蘭はぐったりして、目を閉じた。瞳には、少しだけ涙がたまっている。…蘭、ごめん。またこんな風に、いや、今度はもっと、お前を傷つけちまうかもしれない。…それでも、お前がこの世界中で一番大切なことに、変わりはないから。

「蘭、愛してるよ。世界中で、誰よりも。」

オレはポツリと呟くと、お粥を作ろうと、部屋のドアノブに手をかけた。

（後書き）

初めまして、あるいはこんにちは。林檎の葉です。あ～もう、やばいですよ、この小説！最初は歌の歌詞を絡ませるつもりだったんですが、気づいたらこんな内容に…。だ、大丈夫でしたか？
内容についてのコメントですか？…聞かないでください。もう、今回はノーコメントということで許してはもらえないでしょうか…？
こんな小説の評価をしてくださるんでしたら、ぜひお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8010e/

誰にも触れさせたくない

2010年10月28日04時05分発行